

日本における ACTFL-OPI 黎明期

村野良子（1991-1994 会長）

1989 年 12 月 24 日・25 日

日本でおそらく初めての ACTFL-OPI ワークショップが永福町(株)アルク地下スペースで2日間にわたって開催されました。この短期ワークショップが日本語 OPI 研究会の最初の一步でした。牧野成一先生と鎌田修先生によるインタビュー実演を含む話し言葉の評価というスリリングな講義は、両日会場を埋め尽くした日本語教師にとって、衝撃的なクリスマスプレゼントとなりました。

「話せるようになりたい」と学習者は口をそろえる。話せるようになるとはどういうことなのか。話す能力をどう測ればいいのか。話せるようにするにはどうすればいいのか。

それぞれの現場で、経験的に独自の方法で会話テストを実施し、会話力を伸ばす試みを重ねてはいましたが、評価の基準も教師によって異なり、ましてや機関間で共有できる評価方法はまだありませんでした。「これは見逃せない」、そう直感したことを覚えています。

1990 年 3 月 1 日～4 日

第1回テスター養成ワークショップが(株)アルク共催で開催されました。

全国各地から集まった参加者 25 名が2つのグループに分かれて研修を受けました。トレーナーは牧野成一先生とキヨ・ヤマダ・スチーブンソン先生。場所は(株)アルクの研修施設。英語の OPI ワークショップも同時に開かれました。

1991 年 ACTFL-OPI の会スタート

日本でのテスター第1号は堀歌子さん。1990 年末には、第一期生テスターが続々誕生しました。株式会社アルク日本語事業部鶴沢巧氏のご提案を受け、翌 1991 年 ACTFL-OPI の会が発足。10 月 25 日の第1回会議には、1 期 6 名、2 期 11 名のほかに米国で資格を取得した2名が出席し、会の組織について話し合いを持ちました。テスター資格を獲得したテスターの勉強会という性格をもつ一方で、テスター資格を仕事に結びつけるべく企業向けのテスター派遣、認定証についても検討を重ねました。

1992 年プロジェクトチーム活動

会は日本語事業部の協力の下、(株)アルク本社の4階和室を会場として、定期的に集まりましたが、1992 年からは、具体的なプロジェクトチームが発足し、それぞれの部会が活動を報告し議論する場になりました。3つの大きなプロジェクトがありました。

(1) ロールプレイカード作成プロジェクト（リーダー 文野峯子さん）

ロールプレイカード作成プロジェクトチームは日本のコンテキストに即した中級、上級用ロールプレイカードを作成。その韓・中・英語版を6月のワークショップで牧野先生、根津先生に試用していただきました。出版の可能性も考えましたが、テストに使用するという本来の目的から外れるという牧野先生のご指摘を受け、内部で使用するカードということに落ち着きました。ロールプレイカード作成プロジェクトチームは一旦解散、新チームで改良と完成版作成に当たることになりました。

カード作成のためのシラバス、構成概念表、手書きのロールプレイ原案、学生に依頼した手書きの翻訳版などは、廃棄処分にはできず、まだ保管しております。「滝沢」や「ルノール」で、メンバーと会合を重ねた時間は貴重な思い出です。

(2) マニュアル翻訳プロジェクト (リーダー 堀歌子さん)

牧野先生からのご提案で英文のマニュアルを翻訳することになり、ACTFL との交渉や翻訳監修を牧野先生がお引き受けくださいました。堀歌子さんの指揮の下、翻訳チームが会合を重ね、1992 年末には牧野先生による原稿チェックも済み、製本にむけて順調に仕上がっていました。(株)アルクには ACTFL との交渉という最大の難問が残っていましたが。

1989 年版のマニュアル *THE ACTFL ORAL PROFICIENCY INTERVIEW TESTER TRAINING MANUAL (1989)* が完成したのは、1995 年 11 月でした。

記者（敬称略）は石橋玲子、伊藤博子、宇佐美まゆみ、深田嘉昭、札野寛子、深谷久美子、堀歌子、溝口聡子、村野良子、協力者は佐野ひろみ。ACTFL との連絡や会のお世話には(株)アルク日本語事業部の鶴沢巧氏と海老沢久氏がご尽力くださいました。

その 1989 年版の改訂を受け、1999 年版のマニュアル *THE ACTFL ORAL PROFICIENCY INTERVIEW TESTER TRAINING MANUAL (1999)* は 1999 年 6 月に日本語訳改訂版として出版されました。記者（敬称略）は石橋玲子、伊藤博子、荻原稚佳子、北澤美枝子、齊藤真理子、札野寛子、深谷久美子、堀歌子、村野良子。

(3) チェックリストプロジェクト (リーダー 札野寛子さん)

形式、プロトコル、トピックに分けて、レベルごとのチェックリストを検討していきました。

1993 年 1 月 1 日 「日本語 OPI 研究会」発足

ACTFL-OPI の会の会則について討議を重ね、ようやく会則が決まり、1993 年 1 月 1 日をもって名称も「日本語 OPI 研究会」Japanese Association for OPI in Japanese となりました。1992 年 12 月の会合で役員を選出の運びとなり、推薦された堀歌子さん、伊藤博子さんが辞退されたため、村野が引き受けることになりました。副会長は深谷久美子さん、会計は齊藤真理子さんで正式スタート。とはいえ、ここまでの活動は堀歌子さんの献身的なお働きと初期のメンバーの熱意の賜物であったことを改めて思い起こします。15 名前後の少人数でしたが、都合をやりくりしてほぼ毎回全員が出席しました。職場の同僚とは違い、言いたいことを、そのままぶつけて話し合える仲間と共有した充実した時間でした。牧野先生も参加して議論に加わってくださったこともありがたいことでした。

今回「日本語 OPI 研究会のあゆみ」というテーマを与えられ、昔の資料を読み返す機会を持ちました。ご一緒させていただいた皆様のお名前を拝見し、奮闘していた昔を懐かしく思い出しました。

「日本語 OPI 研究会」の創設から発展期へ

深谷久美子（1995-1997 会長）

1. はじめに

助走期間 2 年間を経た後、1993 年 1 月発足の「日本語 OPI 研究会」の 2 代目会長を拝命しました。1995 年 1 月から 1997 年 3 月まで務めました。当時は 1 月始まり、12 月締め の 1 年でしたが、12 月の任期終了時点で会長を引き受けてくださる方がなく、1997 年 3 月まで延び延びになってしまいました。それが、現在まで続いており 3 月が役職の交替期になっています。当時副会長だった齊藤真理子さんが他の機関の役職についていたので、会長職は困難ということでしたが、なんとか 3 月には引継ぎのお願いができてほっとしたものです。

2. 研究会のコンセプト

当時の「日本語 OPI 研究会」のコンセプトは、「会員はみな平等」ということでした。つまり、「先生」という呼称は牧野先生だけに使い、あとはお互い「〇〇さん」と呼び合いました。というのも、会員は皆、所属校では先生だったからです。そして、研究会に関する仕事は平等に受け持ち、情報はすべて開示するというものでした。年 3～4 回の日本語 OPI 研究会は、ほとんど永福町にある(株)アルクの和室で行われ、議長も書記もそのつど選出して、順番に業務を負担するやりかたでした。担当した仕事の対価や交通費などの支給はなく、すべてボランティアでした。今日のように会員数も多くなかったからできたことかもしれません。他の元会長の皆様が書かれているように、研究会の記録がメールで送られる時代ではなかったので、書記担当者も大変でした。

また、率直に意見を言い合うことが合意されていました。とにかく組織というものは、なかなか本音がいいにくいところがあります。しかしながら、研究会は組織というほどの拘束もなく、お互いの利害関係の対立がないわけですから、本音で意見を交換するのに、なんの支障ありません。現在のように組織が大きくなりすぎると、人の思惑を気にしたり、必要なことも言えない、あるいは、諦めてしまう恐れが出てきます。これから意義ある研究会として発展していくためには、会員同士、互いの本音を率直に述べ合うことが求められます。

3. テスター登録の整備

3-1 テスターの初仕事と規則

わたくしが会長職にあるときの研究会は、どうしても連絡事項が多く、研究会とは名ばかりのときもありました。それでも、結構欠席者が少なかったのは不思議といえば不思議でした。

そのころの大きな課題は仕事として、OPI テスターとしての資格を生かす手立てをどうするかでした。OPI そのものを周知させ、口頭能力試験を受けたいという学習者を増やすことでした。そこで、日本国内の資格を持つテスターがインタビューをして結果を出す場合の規則を作成しました。

この規則を初めて適用したのが、静岡にある会社で働く数人のブラジル人たちへのインタビューでした。谷本由美子さんが静岡まで出かけました。そのテストの結果が、会社の方々の日本語力評価や感じ方と異なるものでした。日本人一般の「日本語が上手」という感触と ACTFL-OPI の結果が一致しないということです。これは当然のことと思われます。ACTFL-OPI の規範に沿った評価ですから、日本人一般の感覚と異なって当然だし、また、それだけ詳細に判定した結果であろうと思われます。

それに続くインタビュー依頼が浦和の国際交流基金日本語国際センターからでした。そのころはテスター登録やその担当者がいなかったため、会長であるわたくしが兼務し、会員の方にはハガキでお知らせしていました。そのテスターとしての資格を仕事として生かせる場所がほとんどなかった状況でしたので、歓迎すべきことでした。ハガキでは当然到着の早い遅いがあり、不公平だという不満が寄せられたこともあります。公平を期すために、前回、テスターをした方は、次は遠慮していただくなど、工夫したものです。同じころに沖縄の技術センターからの依頼もあり、沖縄出張も数年にわたって行われました。これは(株)アルク、ACTFL を通しての依頼であり、第二テスターはアメリカのテスターが果たしました。

4. 今後の日本語 OPI 研究会が目指すものは

口頭能力を測る手段が、今日ではいくつか出てきました。2009 年のソウルでの国際大会で、李徳奉先生から ACTFL-OPI に対して建設的な批判のお言葉を頂きましたが、その場にいた参加者の反応は様々でした。ACTFL-OPI を絶対視するのではなく、日本語に合う OPI の規範があってもいいのではないかという感想を持ちました。「日本語 OPI 研究会」の今後の課題として、ヨーロッパの言語学会の規範とも異なる、日本語独自の規範や評価基準が加わった日本語口頭能力基準（仮称）なるものが新たに出来上がることを切に期待しています。



日本語 OPI 研究会の会員が作成に携わった ACTFL-OPI 試験官養成用マニュアルとロールプレイカード

「日本語 OPI 研究会」常時トレーナー出席の定例会へ

齊藤眞理子（1997-1999 会長）

1. はじめに

私事になるが、1991 年に大学へ異動となったのをきっかけに「何か新しいことを」と思い、ACTFL-OPI ワークショップに参加し、92 年 3 月にテスターとなり、研究会に加わった。テスターとなり、本研究会に入ったことでさまざまな職場の方々と知り合え、また、研究を共に続ける仲間にも恵まれ、とても感謝している。

2. 定例会の課題

研究会結成初期のころは、ロールプレイカードの整備、英語のマニュアルを日本語に訳す作業班など、OPI に関わる仕事が多かったのだと思うが、それも一段落すると、定例会での内容をいかに魅力的にしていくかが課題となってきた。

会長になった日のことは今でも覚えている。会長として何をすべきかさえ認識しておらず、強力な役員、増田真佐子さん(副会長)、伊藤とく美さん(会計・名簿管理)、荻原稚佳子さん(ニューズレター)、深谷久美子さん(テスター登録)に支えられる形で会長となった。

3. 研究会の活性化

会員との連絡を密に

ニューズレター第 1 号は 97 年 4 月に発行されている。定例会議事録のほかに研究発表報告、文献紹介などが載っており、号を重ねるごとに内容が充実してきている。当時、ニューズレターも郵便でお送りしていた。

会費値下げ

本会の会費は発足時、会員数が少なかったこともあり、会費は 1 万円であった。それまでの会計収支を考え、97 年 3 月には 5 千円に下げ、より多くの方に参加頂けるようにした。99 年 12 月にはさらに 2 千円下げ、3 千円とした。

定例会の充実

当時牧野先生は 8 月と 12 月のワークショップ開催に合わせて帰国（来日？）されており、年に 2 回日本語 OPI 研究会に参加して下さっていた。それ以外の定例会が(株)アルクからの報告、各研究班⁽¹⁾からの活動報告のみにならないように、OPI 関連の研究発表も 1 件は組み入れるようにした。

忘れてならないのは、(株)アルクの強力なサポートである。ワークショップが(株)アルクで開催されているだけでなく、研究会の定例会も(株)アルクの会議室を使わせて頂き、研究会の備品を収納するスペースも頂いていた。(株)アルクの中で担当者も決まっており、定例会に担当者が参加して下さり、ワークショップや外部からの OPI 判定依頼についてご報告頂いていた。コピーも利用させて頂き、外部からの連絡に対しても窓口となっていた。

テープ・ライブラリーの設置

98 年 7 月の定例会で判定が確定しているテープを集め、テープ・ライブラリーを作ることが提案され、(株)アルクから「テープ・ライブラリー」として日本語事業部内のロッカーを一つ提供していただけることになった。99 年 10 月には、ライブラリーに集まったテープをダビングすることを考え、テープダビング機を(株)アルクと折半で購入した。

ワークショップを開催するとき、トレーナーはそれぞれのレベルのテープを受講者に聞かせているのであるから、それぞれのレベルでの判定可能なテープが数多く集まれば役に立つはずではあったのだが、システムの構築が不十分であったため、何本かのテープが集まったまま、それを十分に活用するところまでは行かなかった。

現在、録音機器の発展により、コンピュータ上にテープ・ライブラリーを展開することが可能となっている。LTI のトレーニングサイトはまさに漠然と考えていたテープ・ライブラリーの実現であり、サイトに適格なテープが数多く集まることを切に願っている。

ACTFL-OPI 基準の変更

99 年に ACTFL-OPI 基準が改訂されたことは周知の如くであるが、研究会では、牧野先生を通じ 97 年 12 月に上級レベルが上級－上／中／下の 3 つになるというお話、98 年 7 月には新ガイドラインについてのお話、98 年 12 月には「ACTFL 評価基準の変更点」についてのお話を頂いている。それ以前の 97 年 7 月の会では、牧野先生ご参加にもかかわらず 8 名のみの出席だったものが、12 名、16 名、20 名と多くの方に参加頂けるようになった。OPI に関する正確な情報を提供するという研究会の役割が見えてくる。この基準の改訂とそれに伴い更新方法が変更されたことで研究会参加者が目に見えて増えた。

常時トレーナーが出席する研究会へ

トレーナーの鎌田修先生を中心に関西 OPI 研究会が発足し、99 年 3 月に第 1 回研究会が行われた。関西 OPI 研究会は、2 ヶ月に 1 回テープ判定、OPI に関する研究報告などが行われるとの連絡を頂く。日本語 OPI 研究会でも是非常時トレーナーが出席している状態が望ましいと思っていた。

また私事となり恐縮だが、98 年 7 月と 12 月に牧野先生のワークショップでトレーナー訓練を受け、99 年 6 月にトレーナーとして認められた。

テープ判定会発足

99 年 9 月に第 1 回、12 月に第 2 回、2000 年 3 月には第 3 回のテープ判定会が持たれた。2000 年 3 月には副会長の嶋田和子さんが新会長に選出され、私はトレーナーとしてテープ判定会の運営を受け持つこととなった。

更新方法の変更、定例会を tester session として認定

99 年 1 月からテスター更新方法が変更され、OPI 実践の多寡によりトラック A、トラック B、トラック C の 3 種類に分類され、更新することとなった。トラック B として認められるには、①LTI を通した正式な OPI をときどきする人、②renorming session あるいは OPI tester session に出席している人、となっている。トラック C となるとリフレッシュ・ワークショップか OPI ワークショップに出席しなければならない。

牧野先生は年に 4 回の定例研究会のうち 2 回出席されており、私もトレーナーとなった

ので、定例会を **tester session** として認めてもらえないか本部に尋ね、2000 年 4 月に ACTFL 本部の Professional Programs のディレクター Dr. Elvira Swender がいらしたとき、認めるとの回答を得た。

4. ACTFL-OPI に関連する周辺の動き

次に上げるような周辺の動きにより、OPI は日本語教育界に普及し始めた。

99 年 4 月号から『月刊日本語』では「OPI を授業に生かす」が、『日本語ジャーナル』では「会話に強くなろう」の連載が開始された。『日本語ジャーナル』ではこの後も 00 年 4 月号から「会話トレーニング塾」、01 年 4 月号から「実践！会話トレーニング」が連載されている。いずれも「ACTFL-OPI の考え方を使って」と明記されており、日本語教育の中に OPI が広まるのにかなり役立ったと思う。同時に ACTFL-OPI ワークショップの開催地域、頻度も増加した。会員数も 96 年度 19 名⁽²⁾から 99 年度 38 名へと伸びている。

鎌田先生と山内先生による KY コーパス (1999) は多くの研究を喚起したと同時に ACTFL-OPI の認知度を高めるのにも大きく貢献した。

ACTFL-OPI の知名度が上がるにつれ、テスト派遣の依頼が来るようになった。テストの機会が増えるにつれ、テストの信頼性と判定の正確さが問われてきた。テスト派遣の詳細は以下の通りである。

1. 国際交流基金日本語国際センター
研修生のプレースメントテストの一環として利用
2. JICA 沖縄国際センター 95 年～05 年、年 1 度
実習生の終了テストの一環として利用
3. 青少年日本語コンテスト (北京) の一環として利用、97 年、98 年
4. 海外日系人協会 研修生のプレースメントテストの一環として利用
5. 日本サムスン駐在員の会話試験の一環として利用 76 名

5. 終わりに

98 年 3 月に役員改選があり、多くの新役員が決まった。会長交代の年でもあったのだが、会長が決まらず、もう 1 年留任することとなり 3 年務めたことになる。

振り返ると、当時は会員数も少なく、年 4 回の定例会をいかに会員にとって有益なものにしていくかを中心に考えていればよかった。会員数が増え、他の研究会との連携イベントも増えた現在、会長にかかる負担は格段に大きく、最近の会長・副会長の皆様には大変感謝している。

注

- (1) テープ判定班 (のちにガイドライン研究班)、インタビュー技術の向上班、文献紹介プロジェクト班が活動していた。
- (2) 通信会員 4 名を含む。

他の OPI 研究会との連携・協働のスタート期

嶋田和子（2000-2001 会長）

1. はじめに

1990年3月に初めてOPIテスター養成ワークショップが(株)アルクで開催されてから早10年。2000年は、日本語OPI研究会にとっても大きな転換期となりました。10周年記念行事として、1999年に誕生した2つのOPI研究会「関西OPI研究会（3月）」「韓国OPI研究会（1月）」と共催による「日本語OPI 10周年記念合同フォーラム」を熱海で行いました。この合同フォーラムは、翌2002年エジンバラ大学、2003年ソウル建国大学、そして2004年プリンストン大学と、毎年のように実施された「OPI国際大会」へと発展していきました。まさに、大きく成長し始めた日本語OPI研究会がソトにも目を向け、国内や海外の研究会やテスターとの連携・協働を強化していった時期であると言えます。

このように研究会としても会員数がどんどん増え続けた時期であり、またネットワーク作りに力を入れ始めた時期でもありました。最初は(株)アルク本社ビル4階の会議室で定例会をやっていましたが、どんなに椅子を詰めても入りきらずドアを開けたままにして廊下に椅子を並べての会議ということもありました。その状態を回避すべく会場を探し回ったことを懐かしく思い出します。

また、定例会のたびに新入会員を迎えていたこともあり、会員間の相互理解を深める機会を作る目的で「例会＋懇親会」をスタートさせました。懇親会は毎回、和気藹藹とした雰囲気の中で、定例会では時間切れで聞けなかったことをトレーナーに質問したり、新マニュアルやテープ判定結果について活発に意見交換を行うなど、大勢の会員が参加して楽しく有意義な時間を持つことができました。

また、会長になった年、1. 定例会の内容の充実、2. プロジェクト活動の推進、3. テープ・ライブラリーの充実、4. ACTFLへの働きかけ、5. 関西OPI研究会との連携、という5つの課題を提示しました（「ニューズレターNo.13」）。本報告では、こういった課題を中心にこの時期の報告を行い、最後に「熱海フォーラム」についてお伝えします。

2. 定例会の内容の充実

定例会では1999年夏よりOPIテープを聞いたあと、判定基準・発話の抽出法などに関してさまざまな角度から話し合いをするといったブラッシュアップセッションを始めました。これは現在も引き続き実施されていますが、当時はガイドラインの改定、新マニュアル作成などがあったため、会員にとって重要なセッションになっていたのです。特に、それまで上級が2つのレベル（上級／上級－上）であったものが、現在のような3レベルになるという大きな変更があり、テスターに「学び直し」が求められました。

こういった転換期であったことから、インタビュー技術や判定に関してトレーナーから講演をしていただき、新情報の正確な取得にも努めました。また、同時にインタビュー技術の見直しにも力を入れ、「超級レベルの抽出法・判定の仕方」「段落再考」といった講演を牧野トレーナーにお願いしたり、定例会の充実に向け試行錯誤した時期でもありました。

3. 新たな活動のスタート

これまでにいくつかのプロジェクトが活動していましたが、新会員が増えたこともあり、「新しいプロジェクト」を募集することになりました。2000年9月発行の「ニューズレターNo.14」に載った記事を抜粋でご紹介したいと思います。

「新しい活動へのお誘い」 <抜粋>

- ・ OPIホームページの立ち上げやインタビュー技術に関する活動に参加してみませんか。
- ・ 現在のところ、
 - ① OPI研究会のホームページの立ち上げ
 - ② インタビュー技術向上のためのプロジェクトの動きがあり、少しずつですが、活動を始めています。
- ・ <運営委員よりひとこと・・・・・・>
このようなプロジェクトについても、MLを積極的に活用していただいて、活発な意見交換をしていただければ……と思います。

今では、すばらしいホームページが私達の活動を支え、MLでさまざまな連絡・報告がなされていますが、この時期の研究会ではML活用、ホームページの立ち上げを呼びかけ、少しずつ整備を始めたところでした。「MLと一般のメールの違い」をニューズレターで説明をしたり、「テスター募集をメールでOKにした場合には、メールをしていない人には不公平になるので、一律葉書申し込みにすべきではないか」といった話し合いが行われたりしたものです。『ACTFL・OPI試験官養成用マニュアル 1999改訂版 日本語訳』がテストの手元に届いたのも、2001年年明けのことであり、この時期さまざまなことが大きく動き始めたのです。

4. 連携強化の試み

先ほど述べたように、関西OPI研究会、韓国OPI研究会との交流が始まり、関西OPIの合宿に当研究会から複数参加したり、韓国OPI研究会桜井会長が帰国なさった折に定例会に参加くださるなど、行き来が始まりました。2000年夏には、「韓国OPI研究会・会誌第一号」が送られてきました。

忘れられないことの一つとして、2000年11月に行われたソウルでの「日本語OPI&韓国OPI研究会懇親会」があります。ちょうど同徳女子大学で行われた日本語教育国際シンポジウムに参加するため、ソウルを訪れることになったのですが、桜井会長から「ぜひ、夕食会を！」というお誘いがあったのです。

当日は、韓国OPI研究会から十数名の会員の方、牧野トレーナー、水本九州OPI研究会会長（その当時はまだ「九州OPI研究会」は生まれていなかったのですが）など大勢でOPIについて熱く語りあった会でした。こうした積み重ねがあって、2002年以降のOPI国際大

会開催へとつながっていきました。

5. 「日本語OPI 10周年記念合同フォーラム」

日本語OPIの10周年ではありますが、「東京・関西・韓国合同合宿」という形を取ることができたことは大きな意義がありました。実施したのは、3月30日（土）31日（日）の2日間、当初は「50人程度では・・・」と思っていましたが、何と100名を越える参加者数。早々と満員御礼の札を掲げ、当日「どうしても参加したい！」という方にお断りをしなければならぬ事態となり、嬉しい悲鳴をあげたものです。

基調講演は「これまでの10年・今後の10年」と題して、牧野・鎌田両トレーナーによって行われ、また参加者にアンケートを実施しました。その中で「あなたにとってこれからのOPIの10年とは？」という質問がありましたが、[ニューズレターNo.16]からちょっとご紹介してみましょう。この10年で実現できたコトもあれば、今もなお課題として残っているコトも見られます。

◎ OPIの利用法、活用法など

OPIの考え方を授業にもっと生かしていきたい。今までもプレースメントテストとして縮めたものを使ってきたが、教育面とのリンクをもう少し考えていきたい。

口頭能力試験という面ではなく日本語教育においてこの基準を基に4技能教育のフィードバックに利用したい。

◎ テスター更新など

テスターがどれだけ資格を更新するかによってOPIの存続または存在意義が違ってくると思う。更新の手続きその他がもっとクリアになって、研究会で情報が得られるとよいと思う。更新手続きを正確にテスターに知らせてもらえるとありがたい。

◎ OPIの課題など

OPIが生き残るためには、誰が判定してもほぼ同じ結果が出るという判定基準とわかりやすいインタビュー技術を明記することが必要なのではないだろうか。また学習者にも理解できる基準であることも大切なのではないか。

続いて行われた「外から見たOPI」というパネルディスカッションでは、1. 文化の違いをどう判断するか（齊藤真理子）、2. 日本人は外国人の会話をどう受け止めるか（小林ミナ）、3. 日本語の会話における「段落」（筒井佐代）、4. 「ていねいさ」からみた日本語非母語話者の会話（野田尚史）の4つの発表がありました。当時からOPI仲間の熱い語り合いだけではなく、常に多面的・多角的にOPIを見ていくという姿勢で取り組んでいたことが窺えます。

こうして「熱海10周年記念合同フォーラム」を経て、各OPI研究会はそれぞれの特徴を活かしながらネットワーキングを模索し始めました。

2002-2003 体制確立期の日本語 OPI 研究会

荻原稚佳子（2002-2003 会長）

1. はじめに

ACTFL-OPI第2回ワークショップを受講し、私は1991年に第2期テスターの一員となりましたが、1995年から本格的に研究会活動に参加しました。1995年に名簿管理・会計担当として運営委員会の一翼を担わせていただくことになり、それ以後、ニューズレター担当、副会長、会長と運営委員を務めさせていただきました。

その間に日本語OPI研究会は大きく発展し、それと同時に、OPIそのものも日本語教育の中で普及していきました。今や、日本語教師が知っている知識の一つとしてOPIは欠かせないものになっています。OPI普及のために日本語OPI研究会が果たした役割は大きかったのではないのでしょうか。

今回、20周年を迎えるにあたり、ごく一部の内容にしか触れられませんが、会長を務めた2002年から2003年までの日本語OPI研究会の動きについて書かせていただきます。

2. 日本語OPI研究会独立期

2-1 研究会としての体制確立

当時は、会員数が順調に伸びていき、組織としての知名度も高くなってきていましたが、2002年に入り、やっと本当の意味での独立した研究会と言えるようになったと思います。

まず、会長・副会長などの運営委員が変わるたびに、2年間の活動方針を決定し、それに基づいて活動計画や予算を立て、総会で承認のうえ、実行に移すというやり方が定着しました。これは、研究会としての体制が整ってきた表れと言えるでしょう。

2002年からの2年間は、「テスターとしての能力維持・向上」、「OPIに関する研究面での知識向上」、「教育面でのOPIの利用」の3つの柱を立てて活動方針を決定しました。その方針に基づき、「テスターとしての能力維持・向上」のためにブラッシュ・アップに加え、ロールプレイカードの総点検と称して、ロールプレイカードの使い方や問題点などを改めて考え直したり、「OPIに関する研究面での知識向上」を目指して様々な研究発表を行ったり、「教育面でのOPIの利用」を目指し会員による会話教育についての相談会を行ったりして、多面的に研究会活動を行いました。

2-2 「OPI事務局」からの独立とホームページ立ち上げ

次に、(株)アルクが新体制をとるようになり、同社との関わり方が大きく変化していきました。第一の変化は、長年、担当してくださっていたニューズレターの発送作業の打ち切りです。当時、会員数は約100名でしたが、まだ紙媒体で発行していたニューズレターの作成、印刷、封筒への宛名貼りと同封作業、郵送と人手のかかる作業をすべて当会でやることになりました。事務所を持たない研究会としては、非常に苦しい事態でしたが、ニューズレターが現在まで途切れることなく発行されていたのは、その当時の担当委員の方々の大変なご苦勞の賜物でした。

第二の変化は、同社の「OPI事業部」廃止でした。2002年10月には、OPI関連業務はワ

ークショップについてのみ「イベント事業部」が担当し、それまで研究会運営や事務作業をしてくださっていた「OPI事務局」がなくなってしまったのです。

この知らせには、副会長をしてくださっていた行田悦子さんと驚いたことを今でも覚えています。この窮地を救ってくれたのが、その年の夏に完成していた日本語OPI研究会ホームページでした。ホームページ立ち上げは、研究会が10年、会員数が100名となった時点で必要に迫られていたもので、それまでの研究会関係の情報やOPIに関する研究・資料を整理集積・伝達していくためにも、また、会員以外に対して発信する研究会であるためにも必須のものでした。そのため、当時ML管理担当の有吉英心子さん、滝本いずみさんやHP管理担当の磯村一弘さん、菅谷奈津恵さんを中心に、当時の運営委員が総力を挙げて完成しました。その作業は多大な時間と労力を要し、携わってくださった皆さんがひと夏を捧げて成し遂げたものでした。

こうした会員の皆さんのご努力とご協力があって、やっと日本語OPI研究会は、独り立ちしたとも言えます。また、それまでの多くの部分が(株)アルクに支えられていたことも確かであり、この場をお借りして改めて感謝の意を表したいと思います。

2-3 「会話教育のための講演会」主催

さらに、独り立ちした研究会として行ったこととして、当会主催の講演会があります。「会話教育のための講演会」と名付け、「談話分析と会話教育」というテーマで2003年9月に行われました。チケットぴあを通してチケットを販売しましたが、完売し、約120人が参加しました。参加者の70%が会員以外の方であったことから、OPIや会話教育に対する関心の高さが窺えました。

講演会は、2部構成で、前半は東京外国語大学の宇佐美まゆみ先生とポートランド州立大学の渡辺素和子先生から談話分析とOPIとの関連についてお話しいただき、後半は、「談話分析の会話教育への生かし方を探る」というテーマで、小グループに分かれて話し合うという形式をとりました。その後、講師とトレーナーがグループの質問に答えながら、全体討議を行い、意見交換が活発に行われました。この講演会は、多くの参加者がOPIを教育にどのように生かしていくかを考えるきっかけにもなったのではないのでしょうか。

3. おわりに

今から10年前の2001年3月に、「日本語OPI 10周年記念合同フォーラム」が行われましたが、当時、記念行事として何を行うか、運営委員での話し合いをしました。その時、私は英検のようにテストとしてのOPIを実現するために「OPIの日」を日本で行おうと提案しました。時期尚早で、全く賛同を得られませんでした。奇しくも2009年に、試験的ではありますが、「OPIの日」が実現し、10年前に考えていたことが現実のものとなったことに感慨を覚えます。

本当に小さな研究会が、現在のように大きくなるまでには、多くの方の協力がありました。日本語OPI研究会は、あくまでも研究会であり、常に運営委員をはじめとする会員によるボランティアベースでの活動に支えられています。そこに集う才能溢れる会員の方々の力が、研究会をここまで大きくしたと強く感じています。

私自身も、この研究会を通して多くの知識を得ると同時に、多くの友人・知人を得て私の財産となっています。その意味でも、この20年間、日本語OPI研究会の会員でいられたことを改めて幸せに思います。

日本語OPI 研究会の紹介	OPI 入門	OPI資料集
● 日本語OPI研究会について ● 今後の活動方針について ● 日本語OPI研究会会則 NEW ● 運営委員一覧 ● 入会のお誘い	● OPIって何？ ● テスターになるまでの流れ ● ワークショップのご案内	● ACTFL言語運用能力基準 ー話技能(1999年改訂版) ● 「月刊日本語」連載記事 「OPIを授業に生かす」 ● 「ACTFL-OPI入門」紹介 ● 「日本語OPI 10周年記念 合同フォーラム論文集」 ● OPIを利用したコーパス ● 日本語OPI 関連参考文献リスト
日本語OPI 研究会の活動	テストの情報交換	リンク集
● 定例研究会 ● OPI国際シンポジウム ● 会話教育のための講演会 ● ニュースレターより ● 研究班の活動 ● テスターの派遣 ● 他のOPI研究会との交流	● ACTFL入会手続き ● 試験官資格更新手続き ● トレーナーからの寄稿 ● ロールプレイカード(2004年改訂版)購入について	● OPI 関連サイトへのリンク集 ● こんなにある！世界の「OPI」 ● 会員個人HPへのリンク集

図1 日本語OPI研究会 ホームページ<http://opi.jp/>より

2004-2005 会員間の協働とOPIネットワーク

堀井恵子（2004-2005 会長）

「いやと言えない内気な？性格」が災いし、思いがけず会長役を引き受けることになったのが 2004 年 3 月の総会。その年の 4 月から 2006 年 3 月までの 2 年間、運営委員の皆さんの熱い支援と会員の皆さんの協力のおかげで、なんとか研究会の運営を行ってきた。この間に行われた 8 回の研究会と、プリンストンと函館における 2 回の国際シンポジウムへの参加の様子は、ニューズレター No.29～37 に詳しく掲載されている。

当初の研究会運営の目標としては、従来からのテスター能力の向上、研究の活性化、教育現場での利用促進に加え、「敷居が高い研究会」という一部の誤解を解くべく「レベルは高く、敷居は低く」を目指し、「たのしくわかりやすく役に立つ」OPI のため、まずは以下の具体的案を掲げた。

①ロールプレイカード&ロールプレイについて再考

当時の研究会では、ロールプレイの手順・やり方やロールプレイカードについて、ブラッシュアップセッションなどで色々な疑問が出ていたので、それらの疑問を解決すべく、ロールプレイカードプロジェクトを立ち上げ、研究を行った。（詳細については、本論集のロールプレイカードプロジェクト報告を参照されたい。）

②関西、九州、韓国、米国、ヨーロッパなどの OPI 研究会とのネットワークの強化

国内外に日本語による OPI の研究会が増え、国際シンポジウムも開かれるようになり、研究会相互の連絡をはかりつつ、日本語 OPI を活性化させるためのネットワークの必要性が叫ばれ始めていたので、日本語 OPI 研究会としてもそれに対応する必要があると考えた。

③ホームページと ML のさらなる活用

会員数が 100 名を超えたこともあり、時代の要請でもある研究会ホームページの充実、メーリングリストの活用を目指した。ホームページは磯村一弘さん、メーリングリストは高橋薫さんのご尽力で素晴らしいものができ、今も、引き継がれている。



図 2 メーリングリスト <http://groups.yahoo.co.jp/group/J-OPI/>

2年目を迎えた時のニューズレターをみると、こんなことを書いていたようだ。・・・・・・

研究会は協働の場である。会員が互いの存在によって高められるような環境設定が私の仕事かなと思う。よって、研究会でのブラッシュアップセッションでは「気づいたことを言い合うコーナー」で、全員に発言していただいているが、さすがテスター・・・鋭い指摘が続出。しかしこれはもちろん「まな板の鯉」(テーブル提供者)さんだけの問題ではなく全員の問題である。今後はそれぞれのテスターとしての技術面での弱点克服解決方法をみなで探っていきたい。・・・・・・

被験者の口頭能力を最大限引き出すための OPI のインタビュー技術の維持のためには、研究会での励ましあいながらの研鑽が効果的である。会員相互の意見交換も最大限引き出すことを心がけた。

研究会そのものの活動ではないが、2回の国際大会に会長として参加したことも意味深かった。

第3回 OPI 国際シンポジウムは2005年7月にプリンストン大学で行われた。リス、蛍、咲き乱れる花、そしてゴシック風の寮と校舎が建ち並ぶ美しいキャンパスを、牧野先生に案内していただいたのだが、先生の歩く速さに一同走るようにについていったことが思い出される。世界各国から集まった100名あまりの参加者の中での OPI デモンストレーション、日本語教育に関する数多くの研究発表の中で、ACTFL 本部の Professional Programs のディレクター Dr. Elvira Swender の超級ベースラインについての説明も印象深かった。

そして、2006年7月29日～31日に開かれた通称「ハコシン」の第4回 OPI 国際シンポジウムは、(財)北海道国際交流センター(HIF)との共催で行われた。

「言語教育と文化」という大変大きい、しかし、正面からしっかりと捉えておくことは今後の日本語教育や OPI にとって意義深いと思われるテーマを掲げ、エジンバラでの第1回 OPI 国際シンポジウムから培ってきた OPI ネットワークの強化も図りながらの開催であったが、200名近くの参加があった。

「言語教育と文化」をマクロの視点からミクロの視点へという流れで、山折哲雄氏による基調講演「語る、聴く、沈黙する」で始まり、鎌田修、當作靖彦、山田・ボヒネック・頼子、故キリル・ラデフ、コーディネーター嶋田和子によるパネル「文化能力は測れるか？」へと続き、そして、シンポジウム定番の OPI 入門(山内博之)、2日目は OPI デモンストレーション(牧野成一)、さらに「OPI から日本語教授法への提言」と続き、「しめ」は12本の研究発表・・・と、もりだくさんの内容がくりひろげられた。

OPI ネットワーク結成も行われ、また、実行委員長としてはどうしても実現したかった函館名物イカオドリを全員で踊ることも懇親会で達成され、笑いの絶えないシンポジウムであった。(詳細については第4回 OPI 国際シンポジウム報告集を参照されたい。)

これらの国際シンポジウム経験では、他の研究会と一緒にすることで OPI 研究の質が高まることを実感した。

日本語 OPI 研究会 20 年のあゆみの中で、初代会長から長い間かけて育て上げられたものを大事にしながら、時代と社会の要請を受け、研究会は前進し続けてきたのではないか

と思う。比較的若い方や、研究会新会員にも積極的に委員として加わっていただけてきたことも、会の前進に役立ってきたと思う。当時、一緒に委員をしてくださった方々は、今、それぞれの現場で活躍されているが、ともに研究会を支える中で私たち自身、育てられたものも多かったと思う。

OPI の神髄は他者から限りなく「引き出す」こと。さまざまな(教育)現場での実践においても、常にここに立ち返ることが OPI 研究会員にはできるのだと思う。会長・委員が変わっていても、引き継がれていくものが確実にあるように思う。プロフィシエンシーを測る手段として、言語教育を育む手段として、日本語教育に携わる者としては、OPI 活用の可能性ももっと探っていきたいと思う。

2年間を振り返り、改めて楽しい2年間だったと感謝！



2006－2007年度の活動を振り返って

西川寛之（2006－2007 会長）

まず、20 周年おめでとうございます。

「20 周年記念」ということで、会長として運営のお手伝いをさせていただいた時の研究会の様子などを書きます。紙面の制約があるため、副会長としてご尽力くださった高橋薫さんをはじめ、会の運営に多大なご協力をいただいた皆様のことに触れることはできませんが、当時の研究会の様子を記録として書きたいと思います。

2006 年 3 月に新しい運営委員のメンバーが選出され、新年度の運営委員会が発足しました。まず、運営員会でこれまでの研究会の流れを継続していくこと、そして、更なる発展をと考えて、今後 2 年間の研究会の運営方針を確認しました。そこで出た意見は次のようなものでした。

A. 研究会は、第一にテストの技術向上のための仲間の集い・相談の場であること

- a. ブラッシュアップ・セッション
- b. 研究発表の場の提供〈OPI の応用研究含〉
- c. 研究会内の発表に関する対外的評価の向上

B. テスターの利益の確保

- a. ACTFL と OPI テスターとの仲介
- b. OPI テスターが活躍する場を広げること

これらの意見に基づき、新たな試みとして、**ブラッシュアップ・セッションの実施方法の検討、研究会の会則変更、OPI の日設置検討委員会の立ち上げ**という 3 つを行うことにしました。本稿ではこの 3 点について報告します。1. ブラッシュアップ・セッションの実施方法、2. 研究会の会則変更に関して、3. OPI の日設置検討委員会です。

1. ブラッシュアップ・セッションの実施方法の検討

まず、A・a のブラッシュアップ・セッションについては、これまで通り継続をするなかで、新たな提案をいたしました。具体的には、山内トレーナーからの評価に関するアドバイスをもとに作成した評価シートです。活動の中で、評価の仕方についてマニュアルをもっと読み込んだ上で議論ができないだろうか、根拠ある評価の説明力がつけられないだろうかという問題提起がなされ、新たな評価シートの提案を行いました。どのレベルであるかということを問うのではなく、なぜ、このレベルではないのかということの説明を意識するためです。初級から超級まで下位レベルも含めて 1 つずつ可能性を消去し、最後に 1 つ残るものがその OPI 受験者の能力と判定できるように、消去法で絞り込んでいくという手法です。もし、最後に残るものが 2 つ以上であれば、その絞り切れなかった部分はインタビュー技術の問題点として取り上げられ、改善案を議論しブラッシュアップにつながるというものです。

ブラッシュアップ・セッションでテープを出す人はややもすると「自分のインタビューの欠点を指摘される」というような形になりがちです。これを、論拠に基づいて問題点を指摘し、建設的な改善案を提案する（良い点も同様に論拠に基づいて指摘できる）という

ことがこのシート利用の目的でした。判定が絞り切れなかった場合は、そこを絞り込むためのインタビュー技術について会場全体で考えることができます。

実際に一足飛びにこのような形に持っていくことは難しく、マニュアルを研究会に忘れずに持ってきてもらう呼び掛けをるところから始めました。原点に戻り、感想を述べる時でもマニュアルに沿ったコメントをしようという呼び掛けをしました。また、視覚的にも評価結果をその場で集計し、プロジェクターで投影するというやり方も始めました。プロジェクターでの投影などは機械等設備環境とそれを使いこなす人員など、条件が整わなければ実現できません。高橋さんをはじめとした運営委員の協力、その他、会員の方々のご協力の上成立したことで、この研究会だからこそできたことだと思います。

この評価方法については好評で、関西 OPI 研究会でも同様のものが使われるようになりました。OPI にかかわる研究会間の交流としてお互いに良いものを吸収しあえる環境があったことも、ここで一言添えておきたいと思います。

ブラッシュアップ・セッション ワークシート

このワークシートは回収し、セッション終了後にテスターにお渡しします。

インタビューを聴き、消去法でレベル判定を行なってください。

超級	
上級 上	
上級 中	
上級 下	
中級 上	
中級 中	
中級 下	
初級 上	
初級 中	
初級 下	
残ったセルの数	

【メモ】

【コメント】 ratable / unratable

図3 ブラッシュアップ・セッション ワークシート

【判定結果集計】

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	
超級					1							1	1									1		1							5
上級 上		1		1	1	1	1	1			1	1	1	1		1	1		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	22
上級 中	1	1	1			1				1		1				1		1	1	1	1	1		1		1	1	1	1	1	18
上級 下		1							1						1								1	1			1				6
中級 上																						1									1
中級 中																															0
中級 下																															0
初級 上																															0
初級 中																															0
初級 下																															0

図4 集計結果の例

2. 研究会の会則変更

会則については大きく2つの変更をいたしました。研究会入会資格の変更と、年会費の変更です。

2-1 研究会入会資格の変更

研究会に入るための資格について、さまざまな議論がありました。研究を行うという目的であれば広く興味を持つ人を受け入れるべきだという意見、OPI という1つの軸を持って、それを土台に研究を行うために、テスター資格をとった者という条件をつけるべきだという意見、研究会の存在意義として OPI のインタビュー技術の研鑽があるのだから、OPI について共通の理解がある者で話し合う環境を保持する必要があるという意見などがありました。研究会の存在意義にかかわる深い議論で、特にインタビュー技術の研鑽というところに多くの会員が共感を持ちました。その中で、各会員の経験として、「ワークショップ終了直後 OPI テープ提出前の期間にこの研究会のようなネットワークがほしかった」という意見が上がりました。

議論の末、テスター資格保有者、テスター資格保有経験者という入会条件を、ワークショップ受講者と改め、入会できる人の範囲を拡大しました。

2-2 研究会年会費の変更

研究会の運営に関することの1つとして会費の引き下げがあります。定例研究会の各回の出席者数を増やすという目的で回数より内容の充実を目指し、定例会を年4回から年3回にするという議決がありました。会費の引き下げはこれと連動する形で、総会の中で会員から上がった議案でした。研究会が多くのお金をプールしているのは望ましくない形態であるという指摘があり、毎年の運営に必要な費用を会費として集めるという立場から会費を見直し、年会費を3,000円から2,000円に値下げしました。

3. 「OPI の日」設置検討委員会の立ち上げ

これは、テスターとして社会貢献できる環境を整える（a. ACTFL と OPI テスターとの仲介、b. OPI テスターが活躍する場を広げる）ための具体的活動です。

日本国内にいるテスターが正規のテストとして OPI を実施する機会を作る、日本国内で OPI の受験がしやすい環境を作る活動を目的とした委員会です。私が1期前に堀井会長の下、副会長の時から「OPI は日本語教師以外に知られていない」「テスターばかりで（日本で）受験者が増えない」という問題の解決策として考えてきていたものです。活動開始時期がこの時期であっただけで、堀井会長の時の運営委員の方々の支えの下スタートした委員会です。

ACTFL との研究会としての交渉、OPI の社会的な認知度を上げる活動をどのように進めるのかを企画しました。2008 年度には埴誠一郎さんを委員長として新たな委員会が立ち上がりました。その後の経過についてはそちらの報告に譲りたいと思います。

研究会は多くの会員の協力のもと運営されているということを、自身がかかわることで改めて強く感じました。今後もこの研究会が発展することを祈り、期待したいと思います。

2008-2009 OPIを社会に広めるために

金庭久美子（2008-2009 会長）

1. はじめに

2008 年度、2009 年度は「OPI に関する知識向上と情報交換」「テストの能力維持と技術の向上」「OPI の日の実施」を目標に掲げ、活動を行ってきました。この 2 年間でもっとも力を入れたのは、OPI を社会に広め、OPI の知名度を上げるということでした。その一つとして公開研究会を行いました。そして、OPI 日本語会話テスト(ACTFL-OPI 体験テスト)を実施し、さらに、本誌『20 周年記念論文集・報告書』の発行を進めました。

2. 日本語 OPI 研究会の対外的な活動の開始

2-1 研究発表と講演会

2008 年度と 2009 年度は、OPI に関する知識向上と情報交換を行うため、両年ともに研究発表と講演会を同じ日に開催しました。2008 年度は、2008 年 8 月 11 日に行いました。

- ◆研究発表-1 西川寛之氏「OPI のこと知っていますか？」
—他の試験との受験情報の比較 値段・申込方法について—
- ◆研究発表-2 荻原稚佳子氏「ACTFL-OPI 超級話者の特徴
—上級話者との比較から—
- ◆講演 牧野成一トレーナー「OPI の将来」

研究発表と牧野トレーナーの講演でしたので、大変有意義な勉強会となりました。

2009 年度は、2009 年 8 月 1 日に行いました。

- ◆研究発表-1 奥野由紀子氏「ある韓国人留学生の縦断的な発話の変化」
- ◆研究発表-2 橋本直幸氏「OPI から見た『話題』と『語彙』の関係」
- ◆講演 牧野成一トレーナー「第 2 文化習得理論をめぐる問題」

2009 年度は、公開研究会とし、一般の方の参加を呼びかけました。公開研究会は初めての試みでしたが、100 名を超える方からの申し込みがあり、当日は 93 名の参加者が集まりました。たくさんの方にお越しいただき、OPI についての理解の促進が図れたと思います。

この研究発表と講演会の内容については、ニューズレター (NL) に詳しく書かれています。NL 担当者の毎回の NL の力作も是非お読みいただきたいと思います。

2-2 日本語 OPI 研究会ホームページの更新

2002 年に立ち上げた日本語 OPI 研究会ホームページ (<http://opi.jp/>) は、OPI に必要な情報が全てそろっており、世界 31 か国から、1 か月平均 1000 名を超える人が研究会のホームページを訪れています。ホームページは全頁で 203 頁ありますが、そのうち、1 人当たり 3 頁の閲覧があります。この 2 年間は HP 担当のおかげで、ホームページの詳細事

項を更新できました。特に「日本語 OPI 関連参考文献リスト」では、これまでに出版された出版物、掲載論文のタイトルを全て見るができます。

2-3 OPI 日本語会話テストの実施

「なんとかして OPI を社会に広めたい」という思いから、2007 年度に「『OPI の日』設置検討委員会」が設置されました。そして、日本での公式の OPI 会話テストの実施を目指すことにしました。埴誠一郎委員長が中心となって、ACTFL と交渉を始めました。その中で、いろいろな新しい情報を得ました。例えば、通常認定証発行には 134 ドルの費用がかかること、アメリカでは電話方式の OPI が主流であること、ワークショップのテスト資格取得者以外に、オフィシャルテストという資格があること、教育機関で行われたインタビュー結果を 30 ドルの費用とともに本部に送ると、正式認定証が得られること等です。

2009 年度は名称を「OPI テスト準備委員会」に変え、活動を継続しました。そしてパイロットテストとして「OPI 日本語会話テスト(ACTFL-OPI 体験テスト)」を実施することを決めました。会場の手配から、テストの確保、申し込みホームページの作成、受験者募集等の段階を経て、2009 年 7 月 26 日にヒューマンアカデミー日本語学校東京校で行うことができました。受験手数料は 1500 円(正式認定証を希望する者は 4500 円)でした。

にほんご かいわ てすと
OPI 日本語 会話 テスト (ACTFL-OPI 体験 テスト)

じゅげんあんない
I. 受験案内
もうしこみ の まえに
II. 申し込みの前に
もうしこみ
III. 申し込みから受験まで
の 流れ
もうけんと 56 つ
IV. 受験当日から結果通知
まで
V. NEW! ACTFL による
正式認定証発行について
しけん もうしこみ
試験申し込みフォーム

にほんご かいわ
OPI 日本語 会話 テスト
(ACTFL-OPI 体験 テスト)
じゅげんあんない
受験案内

にほんご かいわ
OPI 日本語 会話 テスト とは ?
ACTFL-OPI (ACTFL-Oral Proficiency Interview) の 評 価 基 準 に し た が っ て 、
にほんご べんりょう しゃ
日本語 学習 者の 「 会話 能力 」 を 客 観 的 に 測 る 試 験 です。

と い ち ゃ ん
< 問い合わせ >
にほんご OPI けん せう かい
日本語 OPI 研究会
OPI にほんご かいわ てすと じむ しょ
OPI 日本語 会話 テスト 事務局

図 5 OPI 日本語会話テストホームページより

当日は、ACTFLの指定する訓練課程を修了し、パイロットテストとして認定された20名のうち、18名のテストが参加し、受験者は定員の64名（当日欠席者3名）でした。そのうち32名に対し、所定の審査を経てACTFLの正式認定証が、29名に非公式判定書がそれぞれ発行されました。テストは無報酬で行いましたが、将来的には正式の会話テストが実施できることを強く望んでいます。

現在、運営委員会にはテスト登録という仕事がありますが、2008 年度からはテスト登録担当者が有効なテスト資格を持つ者を把握できるようにしました。今後正式の会話テストの際には、テスト登録担当から紹介する形になっていくと思います。

2-4 20 周年記念論集・報告書の発行の計画

研究会の存在を何かの形で残したいという思いから、2008 年度に本誌『20 周年記念論文集・報告書』の発行を提案しました。初めは書籍の発行を目標としましたが、会員の声を聞き、最終的には web 投票という形で簡易印刷と web 公開に決めました。そして編集委員会を立ち上げ、論文の公募を行ったりトレーナーや会長の方々にお願いしたりして、今回の発行にたどりつきました。web 公開によって一般の多くの方に読まれることを期待しています。

3. これからの OPI

この 20 年の間に、運営委員会の仕事は確実に引き継がれ体制が整いました。私自身も、副会長をはじめ、会計、会計監査、ML 担当、名簿管理担当等の皆様に支えられ、務めを果たすことができました。運営委員会、そして会員の皆様とともに歩んだ 2 年間でした。

日本では、外国籍の方が日本社会で活躍するようになってきました。このような外国籍の方ご本人、そして接触する日本人も彼らの会話能力に興味があるように思います。今後、社会からも日本語会話能力の証明方法が問われるに違いありません。

このような中、OPI に関わる私たちは OPI の普及と発展のために、何ができるでしょうか。OPI テスターとしての技を磨くこと、OPI を用いた研究をすすめ理論的な検証を行うこと、教育現場にも OPI を応用すること、そして、これまで以上に各研究会が連携を深め、OPI の有用性を広く社会に知ってもらおうと同時に、社会のニーズに応える準備をする必要があるように思います。